

横浜市 歴史博物館 NEWS 7 1998・3

- ◇いんたびゅー／稲葉和也「民家を活用すれば、衣食住が理解できる」
- ◇企画展「横浜発掘物語－目で見る発掘の歴史」
- ◇＜研究余話＞古代末期の東国社会と大鎧－都筑区西ノ谷遺跡をめぐって
- ◇収集・収蔵資料の紹介(9) 初代広重「五十三次名所図会」・「東海道五拾三次」
- ◇＜常設展示室探検＞歴史ガイドウォール
- ◇＜博物館ウラバナシ＞展示室には窓がありません。
- ◇ミュージアムショップオリジナルグッズ
ーかわいいミニトートバックー使い方いろいろ
- ◇＜知ってますか？＞外国語リーフレット

いんたびゅー

東海大学助教授
稲葉和也（いなば かずや）

民家を活用すれば、衣食住が理解できる



◎都筑民家園にあるこの「旧長沢家住宅」の主屋と馬屋は昨年、横浜市指定文化財になりました。旧長沢家住宅修理活用委員会委員長としてこの家の保存・修理にかかわり、どう感じていますか。

この家は十八世紀、江戸時代中期の終わりのころ建てられた民家で、中期の特色をよく残しています。江戸時代後期に作られた民家には住んでいる人もまだおられ、各地で見る機会もありますが、ここはそういう民家では味わえないものがあります。江戸時代には幕府が戸障子を贅沢なものとして使用制限したので、この家も板戸二枚に障子一枚の割でしか使っていません。完成した家の中は暗いだろうと予想していました

が、案外明るく、かえって障子一枚のありがたさがよく分かりますね。

社会変化で間取りも変わる

◎復元はどのように行われたのですか。

この家はヒロマ型民家といって、いろいろにあるヒロマ（広間）を、接客にも家族団らんにも使っていました。本百姓という村を構成する農民にも、役職をもつ名主にも共通した、家族本位の住まいでした。それが江戸の中期以降、村の社会階層が分化し、格式を重んじるようになり、ヒロマを仕切り、手前をザシキ、奥をチャノマとして家族の生活を奥に追いやります。この家も、寄贈された時には細かく仕切られ、いろいろの位置も

変わっていました。民家は、農村や社会の変化によって、使い勝手がよいように変わるものなのです。柱や梁に残る痕跡などから、元の形を推定し、組み立てていく過程でもまた、例えば最初は縁側がついてなかったとか、天井が高かったとか、いろいろと分かったのです。

◎この住宅の重要性はどういう点ですか。

江戸中期の雰囲気をとどめていることと、馬屋がついていて、それが外馬屋といって別棟にあり、主屋とは廊下でつながっている。これが、南関東の民家の特徴の一つといえるでしょう。よそでは、土間を仕切って内馬屋としたり、東北地方の曲がり屋などは、主屋の土間から馬屋に行けるよう造られています。この家のような馬屋は、横浜市内ではほとんど見られなくなりました。

土に返る材料で二百五十年

◎こういう民家が建てられたころと現在では、住まい、暮らし、住環境に関して、どういう点が大きく変わっていると思いますか。

昔の民家はまず木、屋根は草、壁は土、というように全部、自然の恵みの中から採った材料、また土に返る材料といえるものでできていました。戦後工業社会となつてから急速に、量産できる金属とか、石油の化学製品とか、土に返らない材料を使い出した。こうなつたのは、便利さを追求したからです。家の中は暖かい方がいいし、ボタンを押せばパッと暖房が入る方がいい。そういう追求による変化が激しかったから、土に返るものの良さを直すゆとりがなかったのでしょう。今、その反省期にきています。今の住宅は平均寿命二十年足らず、柱が腐っ

たら倒して捨ててしまっていますが、この家は二百五十年ももっている。柱が腐つても、根継ぎという補修をしたりしています。そういう利用により、資源を無駄にしないで長らえていく、という発想が日本文化に薄らいてきましたね。

いろいろの火や土の匂いから

◎この博物館は「横浜に生きた人々の生活と歴史」をテーマに、常設展示室でも例えば弥生時代の竪穴式住居の模型などを展示していますが、博物館で「住」に関して伝えるにはどのような手法が求められると思いますか。

博物館の野外施設としてこの民家園が設けられたのは、大変良かったと思います。館内の常設展示では、生活すべてを含んだ「住」の雰囲気は伝わらないでしょう。いろいろ薪の煙をかき、いろいろの火のぬくもりを感じ、土間の土の匂いをかぐというように、民家は五官で感じるものですから。この家の中で展示をする必要はないのです。ここに市民が来て、いろいろや土間などを活用して、住人と同じ体験をする。それで「住」だけでなく「食」や「衣」の文化もすべて分かってくる。これこそ生きた博物館ではないですか。

いんたびゅー・かずやプロフィール

●一九三八年、旧満洲、新京市生まれ。本籍静岡県。終戦の翌年引き上げ、御殿場市で三年、その後焼け野原の新宿区で育つ。一九六三年、早稲田大学理工学部建築学科卒業後、大学院博士課程。中国建築史の研究も文化大革命のため中断。一九六九年、同大学古代工芸部調査に参加。一九七五年から東海大学建築学科に勤務。建築史担当、現助教。文革後、毎年、中国建築研究のため学生とともに調査旅行。一九六五年以降、壊れゆく民家、社寺、近代建築の調査、保存に力を入れる。現在住まうのは横浜市で民家の保存運動をボランティア活動中。東京都、横浜市、世田谷区、台東区、杉並区、大塚町などの文化財保護審議会委員。
●著書「日本人の住まい」(彰国社)「日本の町並み」(関東編、共著、第一法規)「日本民家語彙解説辞典」(共著、日外アソシエーツ)

横浜 発掘物語

—目で見る発掘の歴史—

企画展

横浜市域には、約二、五〇〇か所の遺跡が存在するといわれています。横浜市域の発掘調査の歴史は、一九〇五(明治三八)年、N・G・マンローによる神奈川区三ツ沢貝塚の発掘に遡りますが、以後、現在までに実に一、三〇〇件を超える発掘が行われてきました。

『横浜発掘物語』では、九〇余年にわたる市域の発掘の歴史をひも解き、その成果や問題点を振り返ることによって、遺跡の発掘とは何か、遺跡・遺物の保存・活用の意味はどこにあるのか、これから私たちがやるべきことは何か、といった問題を改めて考えてみたいと思います。

展示資料

- 横浜市域出土の考古資料(重文・県重文・市文化財を含む) 約五〇〇点
- 横浜市域の発掘に関連した印刷物・出版物 約一〇〇点
- 横浜市域の発掘に関わる写真パネル 約一〇〇点

主な展示資料

- 人面付土器(鶴見区上台遺跡出土)県指定重要文化財 横山金吾氏蔵



人物埴輪(市指定文化財、戸塚区上矢部町富士山古墳出土)

『横浜発掘物語』に関連して
次のような事業・イベントを
用意しています。

- ◇未来の博物館へ向けて — 電子展示システムの実験 —
- 『横浜発掘物語』では、N・T・Tデータ通信株式会社の協力により、コンピュータを使った新しい博物館展示の実験を行っています。
- ◇大画面ディスプレイ展示システム

- 人物埴輪(戸塚区上矢部町富士山古墳出土)市指定文化財
- だ龍鏡(港北区日吉矢上古墳出土)重要文化財 慶応義塾大学民族考古学研究室蔵

展示ケースの奥壁に設置した薄型の大画面プラズマディスプレイで、展示資料に関する情報を提供します。ケースの前のタッチパネルを操作して、展示資料の解説や資料の拡大写真、資料が発見された遺跡の説明など、さまざまな情報を見ることが出来ます。

- モバイル解説システム(土・日のみ)
- 個人用携帯型コンピュータ(モバイルコンピュータ)を持って歩いていただき、目の前にある展示資料の情報を、文字・音声・画像・映像のマルチメディアで提供するシステムです。お貸ししたコンピュータを操作して、知りたい情報を自由に見ることが出来ます。

◇本物の土器や石器を手にとって調べる
体験学習室内の受付で企画展チケットを見せると、縄文土器・弥生土器・須恵器・石

器などなど、市域から見つかった遺物を出してくれます。是非、本物の土器や石器(みな完全な形のものを)を、ご自分の手にとって調べてみて下さい。

◇市域の遺跡に関する文献を調べる

博物館が集めた、横浜市域の遺跡・発掘に関する本や雑誌・印刷物を閲覧することが出来ます。自分の町の遺跡、家の近くの遺跡のことを調べてみてはいかがでしょうか。

◇縄文土器の野焼きの見学

三月二十九日(日)一〇:三〇—一四:〇〇
博物館となりの、大塚・歳勝土遺跡公園の体験広場で、縄文土器の野焼きを見学することが出来ます。また、作った土器を使った調理の実験なども行います。

※エントランスホールでは、発掘や整理作業をはじめとする埋蔵文化財センターの仕事をバネルなどで紹介します。

◇出版物案内◇ 展示ガイド 『横浜発掘物語』

展示の内容をわかりやすく
詳しく解説します。横浜
市域の遺跡や考古資料公開
施設のガイドブックとしても
使えます。

定価500円(税込)

●期 間

1998年
3月7日(土)~4月12日(日)

●観覧料

一般	300円
高校・大学	150円
小学・中学	50円

古代末期の東国社会と大鎧

—都筑区西ノ谷遺跡をめぐって—



西ノ谷遺跡の遺構、中央が大溝で、右手破線が鍛冶炉

一 西ノ谷遺跡の概要

古代末期、横浜地域をふくむ東国社会では、次の時代を担うことになる武士たちが、着々とその準備を整えていました。その一端は、横浜市都筑区南山田に所在した西ノ谷

ですが、一二世紀後半には小規模化するという変遷をたどるのです。この鍛冶工房が営まれた時期の遺物には、札・鎌・刀子・引手・鉄・鎌・鋸・釘・金鉄など多種類の鉄製品、多量の鉄塊系遺物・炉壁・鉄滓類があ

遺跡にみることでできます。遺跡は港北ニュータウン埋蔵文化財調査団により一九八七～八八年に発掘調査が行われ、先土器時代から現代に及ぶ各種の遺構・遺物が発見されました。このうち、古代の遺構は次のような変遷が確認されます。遺跡は、八世紀後半には竪穴住居と土坑からなる小集落でしたが、一〇世紀には大溝が掘られ、竪穴形の鍛冶工房が形成されます。鍛冶工房は、次第に大規模となり、一二世紀には掘立柱建物へと変化した屋敷が形成され

ります。中でも未製品をふくむ多種類の鉄製の札の発見は、関東地方では例がなく、画期的なものです。その形態、製作時期から、大鎧を構成した札とみられるからです。

二 大鎧とその源流

源平合戦の武者を彩る華やかな大鎧。これは騎射戦、馬上で弓を射るための騎兵用の非常に重厚な鎧で、兜をふくめると四〇キログラムにもなる場合もあります。構造上の特徴は右引合胸で、合わせる部分が右側にあり、そこが空いており、独立した脇楯を着用する構造になっています。このため大腰部を保護する草摺が前後、左と右の四つに分かれています。胸の正面には弦走という革が張られ、肩の覆いとして左右に袖が垂れ、逆板、障子板、鳩尾板、梅檀板など多くの付属品があります。

大鎧の構成要素は、札・威・金具廻・革所の四つで、主体となるのは札です。札には二行で二三個の孔が空いているもの(特に幅が広いものを「大荒目」とよびます)、「三目札」という三行で一九個の孔が空いているものがあり、この二種類が基本です。材質は堅く固めた牛の革が鉄ですが、革が主体です。札は左側の札を上重ねに孔を一つずつずらし、革ひもで横に綴じます。これが横縫で、札の下半分の二行八孔、三目札では三行一二孔を



西ノ谷遺跡出土鉄製品・札・鎌・鉄・火打ち鎌

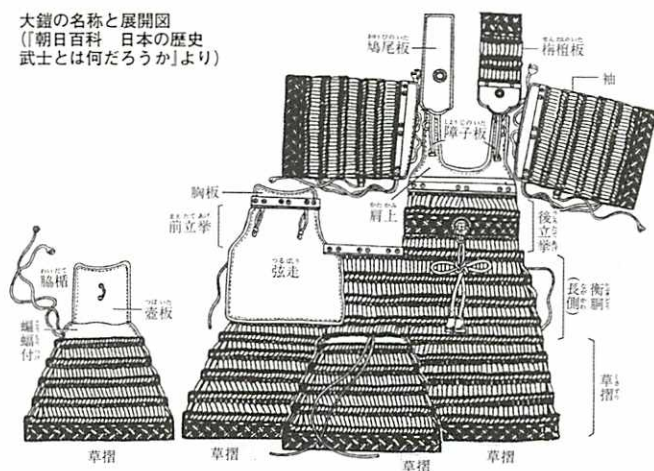
構成要素の中の金具廻は、胸板、障子板、鳩尾板、脇櫛の壺板など鉄板製の部分で、通常は金属のままでなく革張りです。革所は革だけでできた部分または革張り部分で、一番鎧の重さがかかる肩上、蝙蝠付、弦走などです。

それでは、このような大鎧はいつごろ、どのように誕生したのでしょうか。

古代の甲は、古墳時代以降、考古学で「短甲」とよぶ鉄板綴合式の甲、「挂甲」とよぶ鉄札製の甲の二系統があります。札と威を基本とする大鎧は、「挂甲」が基礎になっていると考えられます。

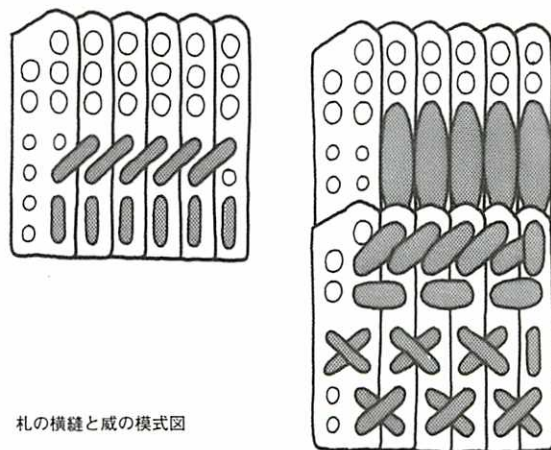
鉄製の杓の変遷に関する最近の研究によれば、最も杓の幅が狭くなる八世紀中葉、威用の孔が杓の上部、横縫用の孔が下部に集中するようになる九世紀の前半に画期があり、一一世紀前半に杓の幅が急激に増加し、三目杓なども生まれるとされています。つまり、一一世紀に大鎧の杓が出現するのです。

また有職故実の立場からは、大鎧の源流は近衛中将・少将が着用した挂甲であるとの見解があります。この挂甲は、前の胴と後の胴を肩の部分でつなぐ構造の両当鎧（りやうたうがよろい）



大鎧の名称と展開図
 (『朝日百科 日本の歴史
 武士とは何だろうか』より)

当系掛甲で、サンドイツマンが看板を前と後にぶら下げるような形態のものです。両当系掛甲は古墳時代にも存在しており、『延喜式』など文献資料にみえる古代の掛甲は両当系である可能性が高いのです。こうした両当系鎧の前胴、左脇楯、後胴が一連となり、右側はそのまま脇楯として残り草摺が四つの大鎧が発生したということです。その時期は一一世紀とされています。一〇〜一一世紀、京の公家社会では武器・武具の伝統様式の儀仗化が起つてきます。「金甲」・「風流甲」の着用など、近衛の掛甲も儀仗化が進展します。こうした背後で、実際に使用する弓箭、刀剣などの武器としての進展が起るのです。この時期にみえる「綴牛皮」は牛皮を綴じた騎兵(騎射)用の甲であり、大



札の横縫と威の模式図

鎧発生当初の異称といわれています。

西ノ谷遺跡で発見された札には、二行一
三孔、三行一九孔、二行で一〇孔以上ある
幅四・五センチ、長さ五・七センチ以上の大型
品、側縁と底辺に折返しをもつものなど数
種類があり、いずれも漆が塗られた様子は
認められません。形態的には京都府
法住寺殿跡出土の札、伝世された一一世紀
代の愛媛県大山祇神社、愛知県猿投神社の
大鎧の札に類似し、同時期のもものとみて、
遺構の年代と矛盾しません。まさに、大鎧の
成立時期における札ということが出来ます。

三 西ノ谷遺跡と札の製作

西ノ谷遺跡で出土した碗形滓・鉄塊系遺物・札鎌（さしづま）・刀子（さきば）の一部について、金属学的調査が行われています。その結果、碗形滓・鉄塊系遺物の介在物（かいざいぶつ）にはチタン鉱物がふくまれていることが判明しました。これは鉄鉱石系の鉄素材を原料とし、精錬段階で砂鉄を使

用した鋼^{はがね}作りが行われたことを示しています。また札など製品の介在物中にも微細なチタン鉱物が認められていますが、それらは精錬段階で排除しきれなかったスラグ成分に由来するものとみられます。「チタン」という共通の鉱物が存在することから、ここでは^{はがねと鉄}鋼精錬から製品製作にいたる一連の作業が行われていたことが明らかに became したのです。また遺跡周辺には鉄原料の産地はないので、鉄の素材は関東地方以外の地域から搬入したとみられます。

華やかな大鎧は、京の社会の中で生まれ、京で生産されたとの考えがありますが、西ノ谷遺跡は東国の地においても大鎧の札を、鋼精鍊から製作にいたる一連の作業の中で作り上げていたことを示しています。鉄素材の入手経路・鍛冶職人の由来・大鎧の組立地など当時の流通機構にかかわる問題、経営主体が誰かという問題など多くの課題があります。西ノ谷遺跡が古代から中世への転換期において大きな位置を占めることは間違いないでしょう。

(平野卓治)

△参考文献▽

・財 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター「西ノ谷遺跡」 一九九七年
・横浜市歴史博物館「研究会記録集 鉄製の生産・流通と武士団―西ノ谷遺跡の検討を中心にして―」 一九九六年

初代広重「五十三次名所図会」・「東海道五拾三次」

博物館では、横浜地域に置かれた神奈川・保土ヶ谷・戸塚の東海道の三宿をはじめ、江戸時代の東海道、宿場、そこを通る旅人の姿を生き生きと伝える錦絵を収集しています。東海道五十三次を題材とした錦絵は、初代広重（二七九七—一八五八）が天保四年（一八三三）頃に発表した保永堂版の「東海道五拾三次」が良く知られています。これは彼の出世作・代表作であり、この後、彼は生涯に二〇種類以上の東海道五十三次のシリーズを制作したといわれています。

ここでは、博物館がセットで収蔵している初代広重の東海道シリーズから「五十三次名所図会」（縦絵東海道）と「東海道五拾三次」（狂歌入東海道）を紹介します。

「五十三次名所図会」は、安政二年（一八五五）に江戸・葛屋吉蔵が版元となつて刊行したものです。縦大判、五五枚で、図柄がいずれも縦の構図になっており、また、葛屋からは嘉永（一八四八—五四）頃にも横中判の東海道シリーズが刊行されているため（博物館ではこのシリーズもセットで収蔵して



五十三次名所図会 程ヶ谷

ます）、このシリーズは「縦絵東海道」と区別して呼ばれています。構図は俯瞰図が大部分ですが、品川の台場が描かれるなど、横浜開港直前期の状況を反映したものとなっています。また宿場名に続いて、神奈川では「台の茶屋海上見はらし」、保土ヶ谷では「境木立場鎌倉山遠望」、戸塚では「山道より不二眺望」というように図柄の説明が付されているのも特徴です。

後者の「東海道五拾三次」は、横中判、五

六枚で、江戸・佐

野屋喜兵衛が版元

として刊行したもの

です。絵草紙掛

の名主による改印

がないため、発刊

の年は明確にはで



東海道五拾三次 戸塚

海道」と通称されています。京都が「三条大橋」と「内裏」の二図あるため、五五枚の通常のセットより一枚多くなっています。狂歌全五六首は五五人の作品で、神奈川には「双六の旅もいろはのかな川にあがるもたのし春雨の空 松本亭 篤躬」、保土

ヶ谷は「諺のまはるもはやき双六

やいそげばいそぐ程がやのえき

遊鶴亭千代子」、戸塚は「霞日をと

つかの駅路とつかはといそぎて旅

を双六のうへ 遊竹館一調」の狂

歌が添えられています。

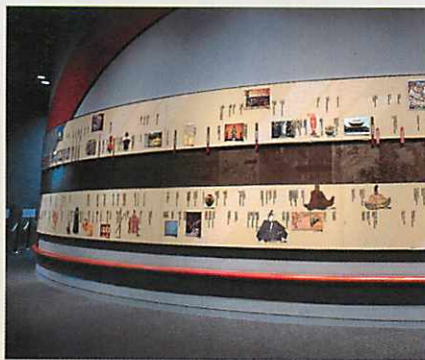
紹介した広重の作品の他にも、北斎の「東海道五十三次」春興五十三駄之内、芳幾「東海道中栗毛弥次馬」などをセットで収蔵しています。これらは今後、企画展などで公開していく計画です。

常設展示室探検

歴史ガイドウォール

常設展示室に入った左側は、歴史劇場の外壁が大きく湾曲して張り出しています。ここに「展示室へ誘うように大きな年表、「歴史ガイドウォール」が展開しています。

ウォールは次のような構成になっています。中央部には原始から現代にいたる各時代を象徴する図柄を置き、その上下に横浜の文化・文化財と



横浜の歴史上のできごとを配しています。さらにその上段には世界の歴史、下段には日本の歴史で重要なできごとをピックアップしています。絵や写真を多用したビジュアルな作りとなっており、横浜の歴史の流れを、文化財をふくめ、日本、世界の歴史と対応させながら追うことができます。展示を観覧していて、ちよつと気になる年次、出来事があったら、このウォールで確認してみてください。



展示室には窓がありません。

来館してくださる方は普段なかなか目にする機会のないことでも、博物館運営には欠かせることのできない活動を紹介するコーナーを新設しました。

博物館の地下には、中央監視室があります。ここでは、博物館すべての電気のこと、空気のこと、水のことを、二四時間体制で取り仕切っています。今日は空気のことをお話しします。

博物館は、雨でも雪でも、暑さ寒さも忘れて、ゆったりと見学できる全天候対応型の施設です。ところが、意外な泣き所があります。

展示室の資料は、新鮮な空気に弱いのです。酸素をたっぷり含んだ風に吹かれるのが嫌いです。資料が酸化によって腐食するのを防ぐためには、外気にまったく当たらないのが理想です。そして、最適な温度・湿度を設定し、それを変化させないこ



展示室は、冬期で、温度23℃±1℃、湿度55%±5%に保たれています。照明によって温度が上昇するので、電気消費料を測定し、調節します。

とが必要なのです。当然、展示室には窓はありません。

ところが、博物館は来館者のため快適な環境を整えなければなりません。来館者が多ければ、展示室の二酸化炭素の濃度が高くなります。そこで毎日、その日の来館予定団体などをチェックし、外気をどのくらい入れるか決定します。開館当初はこの調整に苦心し、展示資料の腐食を防ぎかつ来館者の快適な環境をつくる、その妥協点をみつけるまでに三か月もかかってしまいました。

博物館中央、三角屋根根の四階から六階は収蔵庫になっています。収蔵庫は、考古・歴史・民俗・特別と分かれていて、一、九〇一平方メートルの広さがあり、貴重な収蔵品がしまっています。ここは二重壁になっています。



監視盤ディスプレイで調節します。閉館の放送が聞こえると緊張が解け、ホッとします。

で、冷暖房の風が直接あたらないようになっています。来館者が見学する場所ではなく、一度に多くの人間が入ってくることはないの、収蔵品優先となっています。外気の送気量は少なく、一〇パーセントに固定され、年間を通じて冷暖房を併用し、温度・湿度を一定に保っています。一日の温度変化はプラスマイナス〇・五度以内、湿度はプラスマイナス二パーセント以内とされています。デパートのワイン庫と似た作りになっています。

このように、毎日お越しいただく観覧者の方には快適な見学環境を提供し、また、貴重な資料の腐食を防ぎ、後世に残し、百年後の人々にも見学していただけるよう、毎日奮闘しています。こんな目立たない活動があることを、今度お越しになったら思い出してくださいね。

かわいいミニトートバッグ — 使い方がいろいろ

今回ご紹介するのは、今流行のトートバッグのミニ判です。以前に販売していた赤とグリーン色のミニトートバッグが大変好評だったので、今回、赤、黄、青の三種類を新しく作りました。大きさは、ヨコ一八センチ高さ一一センチと、とてもコンパクト。お子様のおでかけ時のバッグやちよつとした小物入れにも使える大きさです。

ワンポイントになっている馬は、横浜市戸塚区の上矢部町富士山古墳で発見された、

Museum Shop Original Goods ミュージアムショップ オリジナルグッズ



馬の形をした六世紀の埴輪をデザインしたものです。この馬の埴輪はバズルや、ニース NO.5で紹介した一筆箋の柄にも使われています。

富士山古墳からはこの他にも、盾を持った人物や鳥の形をした埴輪が見つかっています。人物の埴輪もミタオルや手拭い、バズルなどのデザインに使われています。

こうしてミュージアムショップでは、博物館の資料を活用し、皆様に楽しんでいただけるような商品をつくっています。

《3色・各480円(税抜)》

INFORMATION

今後の企画展のお知らせ

- ◇江戸時代の村と名主—久良岐郡上大岡村 4月25日～6月7日
江戸時代の横浜地域の村と名主のあり方を、武蔵国久良岐郡上大岡村(現在の港南区上大岡東・上大岡西周辺に相当)を対象とし、同村の名主であった旧北見家所蔵資料を中心に展示・紹介します。
- ◇収蔵資料展Ⅲ 7月25日～9月13日
博物館で収集・保管している資料を公開します。
- ◇古代末期の東国社会(仮称) 10月10日～11月23日
西ノ谷遺跡出土の鎧の小札をはじめとする各種鉄製品の出土遺物を中心とし、古代末期における横浜地域を含む東国の武士団の形成の過程を立体的に描きます。

??????? 知ってますか???????

外国語リーフレット

国際都市といわれる横浜。歴史博物館でも、時々、熱心に展示をご覧になっている外国の方々を見かけます。

常設展示室の通史展示では、大項目を英語で表記し、外国人の方々に展示をみていただく手引きとしています。

この他に英語、中国語、ハン

ルの3種類の外国語リーフレットを用意しています。リーフレットには、歴史博物館の概要、常設展示室を構成する通史展示室、歴史劇場、スタディサロン、映像コーナーの案内とともに、通史展示室の展示構成やメインとなる模型などが簡単に紹介されています。総合受付やスタディサロンにいる案内係に声をかけていただければ、お望みのリーフレットをお出しします。外国からいらっしゃるお客さんをご案内する時などにもご利用ください。

今後は、外国の方々へのサービスをより充分なものにしていくため、英語版の常設展示案内なども作っていき考えています。



横浜市歴史博物館 ● 日誌 ●

(97年10月1日～98年2月28日)

- 10月4日 10月のハイビジョン・ビデオシアター(土・日・祝日上映)「始皇帝—黄土高原・果てしなき攻防」(都筑民家園 旧長沢家住宅の復元)
- 10月11・12日 体験学習「土偶づくり」
- 10月17日 歴史講座「古文書解読教室—初めての古文書」(12月19日まで毎週金曜日連続10回)
- 10月25日 特別展「中世よこはまの学僧 印融—戦国に生きた真言密教僧の足跡」開催(11月24日まで、観覧者5,239人)
- 10月29日 <ふるさと横浜探検3>よこはま事はじめ①野毛
- 11月1日 11月のハイビジョンシアター(土・日・祝日上映)「皆金色の極楽堂—中尊寺金色堂」
- 11月2日 シンポジウム「古代東国の石文」開催(共催)
- 11月3日 都筑区民まつり・青葉区民まつり出展参加
- 11月6日 「アンコールワット展」開催記念文化講演会開催(共催)
- 11月8・9日 体験学習「風車づくり」
- 11月9日 特別展関連講演会 坂本正仁氏「室町時代の関東における真言宗の展開」
- 11月23日 特別展関連講演会 真鍋俊照氏「密教マンガラと美術」
- 11月26日 <ふるさと横浜探検4>戸塚宿探検
- 12月6日 12月のハイビジョンシアター(土・日・祝日上映)「開戦パルハーパー」
- 12月13・14日 体験学習「風づくり」
- 12月25日から27日 <ん蒸のため臨時休館>
- 1月10日 1月のハイビジョン・ビデオシアター(土・日・祝日上映)「水の表情—越前和紙の美」(東海道と横浜)
- 1月17日 「収蔵資料展Ⅱ」開催(2月22日まで、観覧者4,690人)
- 1月24日 防火訓練(都筑民家園)
- 1月31・2月1日 体験学習「紙すき」
- 2月1日 2月のハイビジョンシアター(土・日・祝日上映)「始皇帝—永遠の命を求めて」
- 2月14・15日 体験学習「まゆ人形づくり」
- 2月22日 特別講演会 稲葉和也氏「横浜の民家」

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

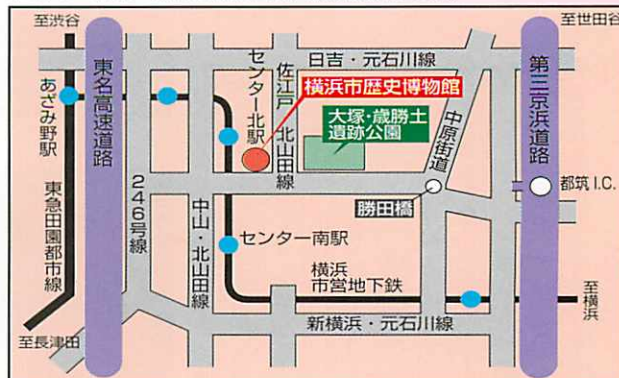
- 開館時間
午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン
- 休館日
月曜日、祝日の翌日、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。
- 常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

- ◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
- ◆第2・第4土曜日は、小・中・高校生は無料です。
- ◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

- インターネットホームページを開設しています。ご利用下さい。
<http://www.via.or.jp/~imnet/yokohama/index.html>

編集後記

博物館ニュースでは「研究余話」として博物館ウラバナしの二つの新連載を始めました。いかがでしたでしょうか。企画展「横浜発掘物語」では、コンピュータを使った新しい博物館展示の実験を行います。早いもので当館は四年目を迎えました。今後も魅力ある博物館をめざし、変化していきます。

